

広島平和記念式典中学生派遣事業

平和とは何か、未来への想い

市では戦争の悲惨さと平和の尊さを学び、後世に伝えることを目的に、8月5日から7日までの3日間にわたり、次代を担う中学生の代表6人を広島へ派遣しました。終戦80周年という節目の中で、結城市の未来を担う子どもたちが、被爆地・広島でどのような体験をし、何を学び、どのように感じたのかを写真とともに紹介します。

問 市生涯学習課 生涯学習係 TEL 32-1899



- 1 原爆ドームの見学
- 2 原爆の子の像で各中学校および平和展示場で作成した千羽鶴を奉納
- 3 原爆投下当時あった銀行の階段
- 4 平和の願いを込めた灯ろうを流す様子
- 5 慰霊碑への献花
- 6 広島平和記念式典に参列
- 7 ヒロシマ平和学習プログラム「平和学習の集い」に参加
- 8 平和記念資料館
- 9 国際会議場前で小山市野木町を含めた広島平和記念式典中学生派遣団の集合写真



飯田 陽愛さん
(結城中学校)

広島平和記念式典中学生派遣事業に参加し、原爆の恐ろしさと平和の尊さを強く実感しました。また、平和記念資料館や原爆ドームを見学し、当時の人々の苦しみを知り、言葉を失いました。これからは、私たち世代が平和の大切さを伝えていかなければなりません。そのため、広島での学びを多くの人と共有し、平和の尊さや命の大切さを未来に伝えていきたいと思います。



戸ヶ崎 夢希さん
(結城中学校)

戦後80年の広島。時が止まったかのような原爆ドームの姿は、今もなお、過去の悲しみを静かに伝えていました。1発の原子爆弾が、人々の命や笑顔、未来をも奪ったという事実を現地で学び、心が痛みました。平和な世界を築くためには、願うだけでなく、一人一人が行動し、対話や思いやりの心をもって接することが大切です。「過去を知り、未来を守る」その一歩を私たちから始めたいです。



二本柳 真奈さん
(結城南中学校)

広島平和記念式典中学生派遣事業を通じて、私は改めて平和の尊さを理解することができました。広島を歩き、原爆の爪痕を目の当たりにしたことで、核兵器の恐ろしさだけでなく、戦争そのものの無意味さを感じさせられました。80年前に実際に起こった悲劇を風化させず、未来の平和を築くための教訓として伝え続けなければいけないという強い使命感をもつことができました。



山中 景惺さん
(結城南中学校)

広島を訪れ、平和記念資料館を見学したり、被爆者の方の話を聞いたりした中で、1発の原子爆弾が、尊い命や家族、街までも一瞬で奪ったことを改めて学び、とても恐ろしく感じました。今、広島は復興し、発展しています。しかし、この世に核兵器があるかぎり、当たり前が壊される危険があります。そのことを知った私たちだからこそ、核兵器廃絶などを訴えることができると思いました。



阿良山 千尋さん
(結城東中学校)

僕が広島に行って感じたことは、教科書や本で学んだことよりも詳しく、そして、戦争は本当に悲惨であるということでした。1945年8月6日午前8時15分に1つの原子爆弾が落ち、多くの大切な命がなくなりました。想像できないくらいの方がなくなった場所に行ったことを思うと、心が苦しくなります。僕たちは、今回の研修で学んだことをたくさんの方に伝えていきたいと思いました。



マグラシア ユーリエさん
(結城東中学校)

派遣事業に参加し学んだことは、「平和の大切さ」や「戦争の恐ろしさ」です。今、私たちは何の危険もなく、いつも通りに過ごすことができます。しかし、戦時中の人々は普通の生活を送ることができず、昨日まで元気だった家族や友だちが、一瞬でいなくなってしまうことがあるくらい、戦争はひどいものでした。私たちは、戦争の悲惨さを忘れようとするのではなく、学び他の人に伝えていくことで、平和を守ることができると思います。